

学校教育目標

「進んで学び 共に歩み 心豊かに自らの道を切り拓く子」の育成

【主体性】

自ら設定した目標に向けて進んで取り組む姿勢

【継続力】

目標実現への見通しをもった粘り強さ

【人権感覚】

他者を大切にする態度

【仲間意識】

友だちとのつながりの実感・共感

【社会性】

他者との協調・配慮、集団に対する責任の自覚及び態度

【自己実現】

振り返りの習慣化・メタ認知

【将来展望】

進路選択・将来の生き方・あこがれ

【行動力】

チャレンジする姿勢・自らの手でつかみ取るたくましさ

みんなのめあて

かがやく子 がんばる みんなと やさしく まえむき

「かがやく子」……一人一人のよさが光り輝く姿
(笑顔が、才能が、個性が、…)

そのために、「がんばる」……目標に向けて粘り強く努力する姿
「みんなと」……人とつながり合いながら高まる姿
「やさしく」……人のおもいや立場を認め、関わる姿
「まえむき」……先を見通して進んで行動する姿

めざす子ども像

知

— 確かな学力 —

すすんで学習する子

- ◆ 学習活動の基本となる「学びの約束やルール」を確実に身に付けることができる。
- ◆ 基礎的・基本的な知識・技能を習得し、学習基盤の確立を図ることができる。
- ◆ 探究活動をはじめとした主体的・対話的な学習活動を通して、関係づける力を身に付けることができる。
- ◆ 日々の授業と連動した家庭学習（15分×学年）を主体的にやり遂げることができる。
- ◆ 決められた学習だけでなく、子ども自らが選択した課題をもとに、自主学習に積極的に取り組むことができる。
- ◆ 興味をもつたことや疑問に思ったことを追究するために、計画を立てて実行することができる。

徳

— 豊かな心 —

やさしい子

- ◆ 自分から進んでいさつをすることができる。
- ◆ 友だちと一緒にやり遂げる楽しさを味わうことができる。
- ◆ 共によりよく生きるために、お互いの生き方や価値観の違いを認め合い、そのよさを伸ばしていくことができる。
- ◆ 友だちの心の痛みを自分の心の痛みとして感じることができる。
- ◆ いじめ等の行為に対して、正義感をもって対処することができる。
- ◆ 自分のよいところをたくさん見つけ、それを他のために生かそうとすることができる。

体

— 健やかな体 —

元気な子

- ◆ 主体的に運動やスポーツを実践する中で、運動することの楽しさやよろこび、達成感・成就感等を味わったり、心の安定を保ったりすることができる。
- ◆ 心身の健康の保持増進をめざして、基本的な生活習慣を確立することができる。
- ◆ 子ども自らが学校や地域において危険を予測し、適切に行動することができる。
- ◆ 心身の健やかな成長・発達を阻害することに対して正しい知識をもち、毅然とした態度で身を守ることができる。

めざす教職員像

想像力と創造力、そして実践力がある教職員

「想像力」……俯瞰的な眼をもち、先を見通す力と、子どものおもい、保護者の願い、教職員の気持ちを想像する力

「創造力」……子どもを成長させる取組やプロセスを創造する力

「実践力」……温度差なく「共通実践」する力

めざす学校像

次代を見据え、子どもを育むための効果的で効率的な取組のある学校

「取組なきところに成果なし」

今年度の重点

「授業で育てる」

△焦点化指導を進める

「指導が届きにくい子どもに届く授業は、すべての子どもの学力を向上させる」という考えに立ち、『焦点化児童』を設定し、授業を改善する。

△学習集団へ高める

すべての子どもに響き、届く授業づくりにより、学級集団を学習集団に高める

△子どもの力を活用して子どもを育てる

授業の中に意見交流や練り上げのための話し合いを位置付け、共に深める場面を設定することで、学校の特性である「集団で学ぶ意味」を具現化する

△学びの実感、納得のあるプロセスを大切にして進める

少数の子どもの意見によって授業を進めるのではなく、すべての子どもが実感したり納得したりしたことをアウトプット等により確かめながら活動を進める

「まなざしで育てる」

△異学年間のまさざし

上級生は下級生の眼や映る姿を意識して行動し、手本であるという認識を高める（率先垂範）

下級生は上級生のよい姿にあこがれをもち、「自分もあんな上級生になりたい」という希望を抱かせる

△教職員から子どもへのまなざし

教師が決済すれば時間はかかるないが、信頼のまなざしのもと、子どものおもいや心の動きを読み取り、子ども自身がどのように考えているのかをしっかりと聞く機会を大切にする

△子どもから教職員へのまなざし

「教職員は子どものかがみ」であることを自覚し、「言葉遣い」「身だしなみ」「時間を守る」「約束を守る」等の範を示す（率先垂範）

「『効果』『成果』にこだわる」

△「効果」「成果」のある取組にするために

「今まで通り」の取組から脱却し、その取組により子どもをどのように育てたいのか、そこにかけるエネルギーに十分見合う、もしくはそれ以上の「効果」「成果」が期待できるものなのか等、子どもの現状に合わせて一から取組内容を考える

△「効果」「成果」の可視化

地域・保護者への理解を深めたり教職員の意識レベルを揃えたりするためにも、できる限り「効果」「成果」の可視化に取り組む

「地域・保護者と共に育てる」

△保護者の願いやおもいを十分に聴く（傾聴）

教師側の要件を一方的に伝えるのではなく、その前に保護者の話を十分に聴き、おもいの芯がどこにあるのかを探る

△保護者・地域との連携強化は間断ない情報発信から

「おたより」に子どもの生き生きと活躍する様子を載せたり、学校・学年・担任として大切にしていることを含んだ記事を載せたりして学校への理解を深め、子どもを共に育てる気風をつくり上げていく